

帝京大学シルクロード叢書 003

碎葉史研究

山内和也 [編]

帝京大学出版会

はじめに

帝京大学は、山梨県笛吹市にある帝京大学文化財研究所を中心として、2016年からキルギス共和国北部に位置する、かつてスイヤブ（碎葉）と呼ばれた都市遺跡アク・ベシム遺跡で継続的に発掘調査を実施している。2021年からは、科研費基盤研究S（JSPS 科研費21H04984、代表：山内和也（帝京大学））の助成も加わり、体系的な発掘調査が進行中である。アク・ベシム遺跡の調査では考古学がいわゆるエンジンのような役割を果たしているが、考古学のみならず、さまざまな分野の専門家が集まり、シルクロードの国際交易都市であったアク・ベシム遺跡の解明に取り組んでいる。

本書に収められた諸論考は、この発掘調査で得られた成果を補完するだけでなく、アク・ベシム遺跡、つまりスイヤブと呼ばれた都市そのものを文字史料という資料を用いて解明しようという意図でこれまで書かれてきたものであり、この都市が廃墟となる以前の活況を呈する都市だったスイヤブの姿を立体的に浮かび上がらせようという試みである。

碎葉は、中央アジアの西方から入植してきたソグド人によって5世紀頃に建設されたスイヤブという都市の漢字音写である。素葉や睢合、雖合と書かれる場合もある。ソグド人は、陸上の長距離交易を牛耳る商業民であり、碎葉も商業でにぎわう交易都市だったと考えられている。その一方で、ソグド人は農耕民でもあり、また土木工事にも長けていた。西から進出してきたソグド人は、灌漑水路を建設し、谷の北側を東西に流れるチュー川の水を導くことによって、いわゆる「オアシス都市」を生み出しただけでなく、この地域に広大な農地を生み出した。

他方、碎葉の周辺には遊牧に絶好の山岳草原が広がっていたことから、この地域には遊牧民が居住しており、この地に建設された碎葉は、遊牧国家を経済的に支える拠点都市としても発展していった。東方から進出してきたテュルク系遊牧国家の突厥から分立した西突厥は、7世紀の前半期に碎葉を拠点とするようになる。それにともなって、この地域には農耕都市民と遊牧民が共存・共

生ずる世界が登場した。

その一方で、618年に長安（現・中国陝西省西安市）を都として建国された唐王朝は、北方の突厥を打倒してモンゴル高原に進出することにより、遊牧民の騎馬軍事力を獲得した。その後、獲得した軍事力を使って、西方の中央アジアにあるオアシス都市へと支配の手を伸ばしていくこととなる。碎葉もそのターゲットの一つであった。唐が、農耕・商業民の集まるオアシス都市の経済的利権を守ろうとする西突厥を打倒しつつ、碎葉を安定的に支配するにいたったのは679年のこととされている。唐は中央アジア支配の拠点として「安西四鎮」を設置し、碎葉にはそのうちの一つである「碎葉鎮」が置かれた。このようにして、テュルク系の遊牧民、イラン系のソグド人と並ぶ第三の主役として、唐が碎葉に姿を現すこととなった。唐は、従来のソグド人入植者が造った街の東隣に新しい街を建設し、そこを中心に碎葉鎮を運営した。アク・ベシム遺跡には二つの街の痕跡が残されており、現在、西側に位置するソグド人が建設した街は第1シャフリスタン、東側の唐の軍事拠点、つまり碎葉鎮城は第2シャフリスタンと名付けられている。

西方への進出を目指した唐による碎葉の支配は719年には完全に終わりを迎え、その後、突騎施やカルルクといったテュルク系遊牧民の支配に再び碎葉は戻っていく。しかし、わずかな時間であったにもかかわらず、唐の支配は大きな存在感を放っており、この地の歴史や経済、文化に多大な影響を残した。

本書では、オアシス都市としての碎葉、遊牧民が支配する都市としての碎葉、唐が支配する都市としての碎葉、という碎葉の多面性を明らかにした論考が集められている。以下にその内容を簡単に紹介する。

齊藤茂雄による「碎葉とアクベシム」は、碎葉をめぐる遊牧勢力や唐、さらにはチベット高原の吐蕃の活動を通史的に描く。中央アジアのオアシス地域は商業活動が活発な地域であり、それゆえに大国同士の係争地になりやすく、国際関係が複雑に進展する傾向にあった。そのうえ、史料が少ないために確実に分かることが少なく、先行研究によってさまざまな解釈が出されている状況がある。同論考ではそのような複雑な碎葉の歴史を解きほぐして論じただけでな

く、膨大な先行研究を把握したうえで、周辺勢力の国際関係から唐代中央アジア史そのものを再構成している。これまでの研究の到達点を示し、通史を理解するうえで欠かせない論考といえる。

齊藤茂雄による「文献史料から見た碎葉城」は、「碎葉とアクベシム」を踏まえたうえで、碎葉という都市の歴史に焦点を絞りに論じている。上述したように、碎葉は現在アク・ベシム遺跡として知られており、この遺跡で発掘調査が進展している。本論考では、最新の考古学的な調査結果や遺跡からの出土史料の情報も踏まえつつ、各時代の碎葉が持っていた歴史的な性格について論じている。同時に、碎葉を含む唐の中央アジア統治体制についても検討している。この二つの論考を読むことで、碎葉に関わる史料・研究についておおよそ把握することができるため、必読の研究である。

柿沼陽平氏による「唐代碎葉鎮史新探」は、典籍史料、考古学資料、出土文字史料を使いながら、唐代支配期からそれ以前にかけての碎葉史を論じている。唐支配期にあっても碎葉が独立したオアシス国家であった可能性を示唆した点は重要である。また、山内の発掘により第2シャフリスタンが唐の碎葉鎮城であることは判明していたが、50日で完成したと記録されているその土木工事が、実際に可能である事を文献史料に記録された実例から証明した点は注目に値する。

柿沼陽平氏による「王方翼攷」は、第2シャフリスタンの碎葉鎮城を建設したことで知られる唐の將軍、王方翼の列伝の訳注である。唐の正史である『旧唐書』に収められた「王方翼伝」の全文に訓読を施したうえで、張説が撰した「王方翼碑」の記述も参照して詳細な注釈を付けている。正史の列伝は基本史料ではあるが、王方翼の事跡に関しては矛盾や齟齬が多い。同論考では史料を博搜して真摯に事跡の整理を行っているために研究としての価値が高く、読者に資するところが大きい。

齊藤茂雄による「タラス河畔の戦いと碎葉」は、碎葉から唐が撤退した後の中央アジア情勢を描く。これまで、751年に発生したタラス河畔の戦いは、中国とイスラームによる天下分け目の戦いであると見られており、世界史の教科書に取り上げられている戦いである。しかしながら、実際には偶発的な戦闘で

あり、唐軍の行軍目的地はタラスではなく碎葉だったことを近年出土した新出史料を用いて指摘する。世界史教科書にも重大事件として取り上げられるタラス河畔の戦いの意義に再考を促す論考である。

柿沼陽平氏による「隋唐隨身符制新探」は、唐代に一種の身分証として利用された隨身魚符と隨身亀符に着目し、中国の法制度における隨身符の位置づけや実際の運用について論じている。唐一代を通じて徐々に隨身符の使われ方が変化していく様を、さまざまな史料を博搜して明らかにしており、中国史の研究として価値の高い論考である。

柿沼陽平氏による「文物としての隨身魚符と隨身亀符」は、前論考を踏まえて、碎葉のみならず各地で発見された隨身符の現物をまとめて紹介し、その実態に迫っている。これまで個別に紹介されてきた出土遺物としての隨身符をここまで一括して紹介した研究はなく、学術的意義が高い。アク・ベシム遺跡出土史料としては、テュルク系の人物が帯びていた符が発見されており、これはテュルク系遊牧民の重要性とその活躍ぶりを示唆するものである。また、唐から朝貢国に配布された「朝貢魚符」がアク・ベシム遺跡で唯一発見されており、鮮明な写真を付けてこれを紹介している。

残り2本の論考は、アク・ベシム遺跡で出土した漢語碑刻史料である、「杜懷寶碑」に関するものである。

齊藤茂雄による「アク・ベシム遺跡出土『杜懷寶碑』再読」は、杜懷寶碑が持つ造像銘という仏教銘文としての性格に着目して碑文の再読を行い、中原から碎葉に来た人物によって杜懷寶碑が作成されたと結論づけた。加えて、碎葉鎮城にあったとされる大雲寺と杜懷寶碑の関係についても論じ、690年に武則天の命令によって全国に設置された大雲寺の前身となる中国式仏寺が碎葉に存在した可能性を指摘した。碎葉と中国仏教の関わりを論じることに加え、現在発掘が続いている大雲寺と想定される仏教寺院跡（第0仏教寺院）の建立年代を考察するためにも重要な論考である。

福井淳哉氏による「『杜懷寶碑』の書風に関する書道史的考察」は、杜懷寶碑の内容ではなく、書かれた文字の書風に注目したものである。杜懷寶碑の書体は同時代の中原の書体と軌を一にしており、書体の西方伝播の証拠であると

指摘する。この指摘は前論考の検討とも合致するものであり、杜懷寶碑は中原の仏教文化を中央アジアに持ち込んだ碑文であったという性格付けを確かなものとする。なにより、中央アジア出土の碑刻史料に関する書風研究そのものが珍しく、非常に重要な研究となっている。

本書に掲載された諸論考は、本書刊行以前にいくつかの媒体に発表されたものばかりである。それゆえ、章立てや参考文献リストの書き方を含め、書式がそれぞれ異なっており、統一されていないが、基本的に初出論文の書式を踏襲するものとし、本書全体での統一を図ることはしていない。また、本書では、「スイアブ」と「スイヤブ」、「アク・ベシム」と「アクベシム」のように表記が混在している例もあるが、各論考内では統一されていることから、原文のままとし、本書全体で統一を図ることはしていない。なお、本書に収録されている論考における引用ページ数については初出論文のまま残してあるが、中には本書に再録されている論文を引用している場合がある。その場合は、読者の理解の混乱を避けるために、初出論文の引用ページ数のあとに本書におけるページ数を追加してある（例：柿沼 [2019, p 51= 本書 pp. 67-70]）。

本書に収録した論考が発表されて以降、現地において発掘調査は進展し続けており、新たな発見が相次いでいる。そのため、やがては本書の論考も乗り越えられていくことだろう。とはいえ、考古学的な新たな発見を正しく歴史学上に位置づけるためには、文献史料に基づく確固とした見通しが必要である。本書の諸論考が今後の発掘調査を支える礎となり、碎葉という都市の理解の一助となれば幸いである。

帝京大学文学部史学科

齊藤茂雄

帝京大学文化財研究所

山内和也

〈所収論文の初出一覧〉

- 齊藤茂雄 2021：「碎葉とアクベシム——7世紀から8世紀前半における天山南部の歴史展開——（増訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 69-83.
- 齊藤茂雄 2023：「文献史料から見た碎葉城」『帝京大学文化財研究所研究報告』21 (2022), pp. 25-37.
- 柿沼陽平 2019：「唐代碎葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, pp. 43-59.
- 柿沼陽平 2021：「王方翼攷——『旧唐書』卷185 良吏王方翼列伝訳注を中心として——」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 41-67.
- 齊藤茂雄 2023：「タラス河畔の戦いと碎葉——唐の出兵目的をめぐって——」『東洋学報』105-2, pp. 31-64.
- 柿沼陽平 2022：「隋唐隨身符制新探——玄宗即位以前を中心に——」『古代文化』74-3, pp. 38-57.
- 柿沼陽平 2020：「文物としての隨身魚符と隨身亀符」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 127-147.
- 齊藤茂雄 2024：「アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読——大雲寺との関わりをめぐって——」『帝京大学文化財研究所研究報告』22, pp. 71-84.
- 福井淳哉 2020：「「杜懷寶碑」の書風に関する書道史的考察——時代性を中心として——」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 149-157.

目 次

はじめに

碎葉とアクベシム

齊藤茂雄……………1

文献史料から見た碎葉城

齊藤茂雄……………29

唐代碎葉鎮史新探

柿沼陽平……………55

王方翼攷

柿沼陽平……………85

タラス河畔の戦いと碎葉

齊藤茂雄……………139

隋唐隨身符制新探

柿沼陽平……………163

文物としての隨身魚符と隨身亀符

柿沼陽平……………195

アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読

齊藤茂雄……………231

「杜懷寶碑」の書風に関する書道史的考察

福井淳哉……………257

碎葉とアクベシム

— 7世紀から8世紀前半における天山西部の歴史展開 — (増訂版)¹⁾

帝京大学文学部史学科 齊藤茂雄

はじめに

7世紀中葉から8世紀初頭の中央アジアは、新興勢力である唐による活発な軍事進攻が見られた一方、現地の遊牧勢力である西突厥や、やはり新興勢力であるチベット高原の吐蕃の進出もあり、オアシス諸都市の権益をめぐる角逐が盛んな時期であった【図1】。なかでも、唐が西方に進出した最大領域として知られる碎葉鎮の歴史的重要性に関しては、唐の西域支配拠点である安西四鎮との関わりから、古くから関心が持たれ、多くの研究が残されてきた。まず、安西四鎮の沿革について論じた大谷 [1925] があり、後に松田 [1933]、伊瀬 [1955]、佐藤 [1958] などの先学が多大な業績を挙げられている。にもかかわらず、これら諸先学の研究はそれぞれ断片的であって、碎葉を含むタリム盆地周辺の歴史を先行研究の議論をまとめつつ概観するような作業は、森安 [1984] やベックウィズ [Beckwith 1987] が吐蕃帝国の進出を主眼として論じて以来、ほとんど行われていない。しかも、森安・ベックウィズ両氏の研究の後、碎葉と深い関わりを持つ天山北麓に拠った遊牧民である西突厥の歴史について論じた内藤 [1988] が出版されたため、これらの研究をつなぐ作業が必要となった。

また、上記の先行研究ではあまり触れられていないものの、碎葉を含む西部天山地域においては考古学的な調査が進行しており、加藤 [1997] が概説的に紹介を行っているほか、ヌルラン・ケンジェアフメト [2009; 努爾蘭・肯加哈買提2017] の研究もある。その中には、碎葉に関して重要な意義を持つ漢語碑

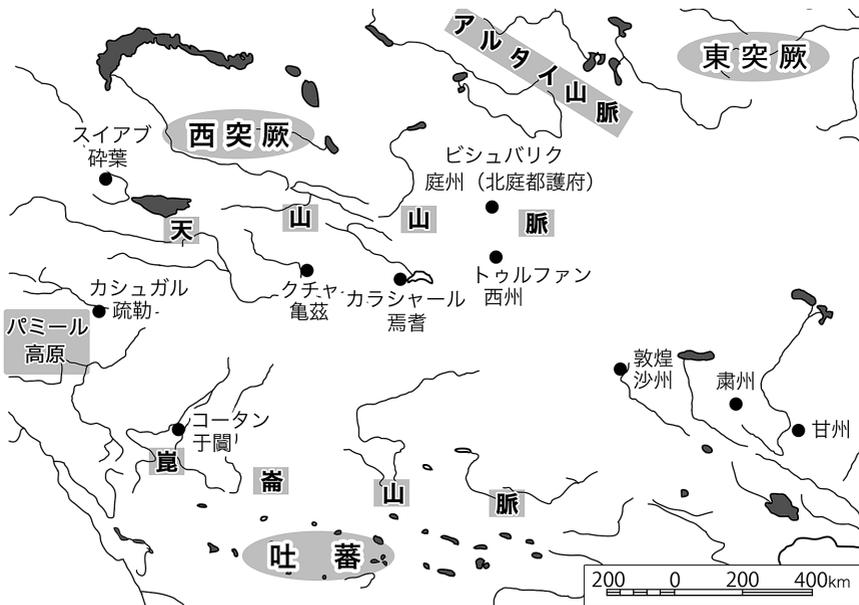


図1 関連地図（『中国歴史地図集 第五冊』, pp.32-33を参考に作成）

文が含まれていて、この碑文に関しても先行研究がいくつか出されている。

以上のような状況から、本稿ではまず7世紀から8世紀にかけての碎葉をめぐる諸勢力の活動、その歴史的展開をできる限り先行研究の議論を踏まえながら年代順に提示し、先学の到達点を示す。続いて、キルギス国アクベシム遺跡出土の「杜懷寶碑」を取り上げ、その碎葉との関わりを紹介したい。

I 碎葉をめぐる歴史的展開

(1) 碎葉と西突厥

本章では、西突厥・唐・吐蕃といった勢力がいかに西域地方に進出し、碎葉と関わりを持ったかを、先行研究の成果に依拠しながら概観する。

碎葉周辺に最初に進出した勢力としては、西突厥がいる。西突厥は552年にモンゴル高原で勃興した突厥の西半部であり、突厥の始祖・ブミン可汗（伊利可汗）の弟であるイシュテミ可汗²⁾を事実上の始祖とする。突厥は583年に東

突厥と西突厥がアルタイ山脈を挟んで分立し、基本的にイシュテミ可汗の子孫が西突厥を継承していった³⁾。

西突厥の本拠地は当初、ユルドゥズ平原（現在はバインブルク平原と呼ばれている）に置かれていたが〔松田1929, pp. 248-287〕、統葉護可汗が碎葉付近に本拠地を移したという〔松田1929, pp. 287-288；内藤1988, pp. 2-3〕⁴⁾。

碎葉（素葉・睢合・雖合とも）とはイスラム史料に現れるスィアブ Sūyāb の音写であり、現在のチュー河を指すが、唐代には既に地名となっており、チュー河流域の平原も指していた〔内藤1988, pp. 1-2〕。そこには碎葉城（現アクベシム遺跡⁵⁾）が建設された。碎葉城に関する古い漢籍中の記述としては、630（貞観四）年に当地を訪れた玄奘の記録⁶⁾がある。

『大唐西域記』卷一〔p.18〕

清池西北行五百餘里、至素葉水城。城周六七里、諸國商胡雜居也。土宜糜・麥・蒲萄。林樹稀疎。氣序風寒、人衣氈褐。素葉已西數十孤城、城皆立長。雖不相稟命、然皆役屬突厥。

【和訳】清池（イシク＝クル）の西北に500里あまり（約220km）で素葉水の都市に到着する。都市の周囲は6・7里（約2.5～3km）であり、諸国のソグド商人が雑居している。土地はキビ・ムギ・ブドウに適している。木々は少ない。（その）気候は風が冷たく寒いので、人々はフェルトの服を着ている。素葉以西にある数十の独立した都市は、皆（各々の）君長を立てている。命令を受けているわけではないが、（西）突厥に隷属している。

この記録で注目すべきなのは、碎葉城には各国から商人がやってきて居住しているという点と、碎葉城を含んだ諸都市が西突厥に隷属しているという点であろう。碎葉城はシルクロード上の国際商業都市であり、当時、強勢であった西突厥に服属していたのである。

では、西突厥の中心地はどこにあったのだろうか。この点に関しては、内藤〔1988, pp.1-21〕の詳細な検討があり、まずは玄奘の報告に注目している。